SSPE病変の描出や経過観察に用い得る可能性が示唆された.

5. 慢性腎不全患者にみられた転移性肺石灰化症の一例

宮内　嘉玄　宮川　直子　（南松山病院・放）
白形　昌人　尾崎　光泰　（同・外）
垂水　禧直　（同・内）
濱本　研　（愛媛大・放）

転移性肺石灰化症は，胸部写真上，明らかな石灰化が認められないまれな疾患であり，その診断には，骨シンチが有用であるといわれている．われわれは，慢性腎不全患者で長期透析を行っている症例に転移性肺石灰化症を認めたので報告した.

症例は38歳男性．慢性腎不全にて昭和54年より血液透析を開始．途中，腎移植にて一時透析を中止したが，拒絶反応にて再開．平成元年5月の胸部写真およびCTでは明らかな肺の石灰化は認められず，小葉中心性の間質主体の結節陰影が肺全体に見られた．骨シンチにてRIの肺野へのび漫性集積が見られ，転移性肺石灰化症と診断した.

6. 肝細胞癌骨転移巣に対する ^{123}I-IMP の集積例の検討

谷川　昇　周藤　裕治　水川帰一郎
岩宮　孝司　堀　郁子　中村　一彦
遠藤　健一　西尾　剛　太田　吉雄
（鳥取大・放）
謝花　正信　（松江市立病院・放）

^{123}I-IMPの肝細胞癌原発巣に対する集積は以前に報告しているが，今回骨転移巣を有する肝細胞癌患者に対して^{123}I-IMPによるシンチグラムを施行し，骨転移巣に対する集積を検討した．対象は，生検または血管造影で肝細胞癌と診断され，骨シンチグラムで高集積を有する症例である．方法は，^{123}I-IMP 111 MBq (3 mCi)を静注し3時間後に骨転移巣のシンチグラムを撮像した．結果は，6例で骨転移巣に高集積が認められた．^{123}I-IMPは肝細胞癌骨転移巣の検索に有用と考えられる.

7. 転移性椎体腫瘍治療効果判定におけるMRIと骨シンチグラフィ

梶谷　明子　杉村　和朗　内田　伸恵
古川　珠見　藤田　安彦　石田　哲哉
（島根医大・放）

転移性椎体腫瘍の治療効果判定について，骨シンチグラフィ（骨シンチ）とGd-DTPA造影MRIの有用性を12例43椎体を対象として比較検討した．放射線治療ないし化学治療前後に骨シンチとGd-DTPA造影MRIを施行し，おのおの異常集積の消失，造影効果の消失を画像上の治療有効とし，臨床症状の改善度と比較し，診断能を検討した．骨シンチのsensitivityは67%，specificityは68%，MRIのsensitivityは75%，specificityは79%であった．わずかにMRIの診断能のほうが高いが有意差はない．しかし，椎体や転移部位の形態的変化および脊髄など周囲への影響を評価できる点から考えると，Gd-DTPA造影MRIのほうが治療後のfollowには有用であると考えられる.

8. ^{99m}Tc-HM-PAO 標識顆粒球による骨系感染症の診断

吉村　尚子　人見　次郎　上池　修
小川　恭弘　前田　知穂　（高知医大・放）
広瀬　大裕　林　暢紹　山本　博司
（同・整形）
浜里　真二　藤本　重義　（同・免疫学）

人工置換術後の感染症の活動性の判定に顆粒球標識シンチグラフィーを用いて評価を試みた．対象は人工膝関節置換術後3例，人工股関節置換術1例，腸腰筋内膿瘍1例の計5例．人工置換術後の3例のみ患部に異常集積が認められた．病理所見でも好中球の浸潤はみられた．細菌検索では陰性であった．1例は患部に異常集積がみられず，臨床所見からも活動性の感染は否定できた．同検査は感染の活動性の判定に有用と思われるが，症例数が少なく今後の検討が必要である.

Presented by Medical*Online